

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 53

幻の古代寺院

播磨・三宅廃寺（三宅遺跡）

寺岡 洋



はじめに

前号では加古川中流左岸で、今まで知られなかった奈良時代の2ヶ所の遺跡から瓦が出土し、寺院に関連する施設、集落があるのではないか、と取り上げた。とりわけ、**上村池（うえむらいけ）遺跡**（加古川市八幡町上西条）は、隣接する**西条廃寺**（加古川市西条山手）創建に密接に関連した集落であると思われる。

今回は、大量の瓦の出土により寺院の存在が想定されるが、まだ遺構が確認されていない三宅廃寺を紹介したい〔姫路市2013 上図 発掘現場 背景は姫路バイパス〕。

〔前号の補足〕

上村池・宗佐遺跡と

東沢1号墳

まず、前回の補足です。

上村池遺跡のおおよそ1



km東、東播磨南北道建設に伴う工事により、5世紀前半の首長墓である東沢1号墳が調査されている。一辺約20mの方墳で、主体部は削平されていたが、祭祀を行った造り出し（上図の出っ張り 5m×1m）と呼ばれる部分が残存しており、家形・壺形埴輪と共に、渡来人の存在を推測させる土器（韓式系（かんしきけい）土器・初期須恵器・ミニチュア土器など）が出土した。

これらの出土品から、「被葬者は渡来人もしくは渡来人と強くかかわった人物」とされる〔兵庫県2013〕。企画展「ひょうごの遺跡 2009~2018」にも県教委が調査した代表的な遺跡として紹介されている。前号で取り上げた宗佐（そうさ）遺跡の遺物も展示されている。

上村池遺跡～宗佐遺跡一帯、風土記の**望理里**（まがりのさと）には渡来系集団の居住が推測できる。

三宅遺跡から三宅廃寺へ—**飫磨御宅**推定地だった

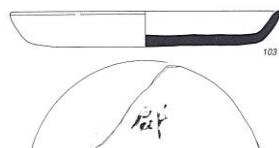
2013年10月4日（土）曇。山陽電車の割引切符で姫路へ。甲子園一姫路駅の距離は、74.4km。阪神電車と山陽電車は大阪↔姫路間を相互乗り入れしている。

発掘現場（姫路市飾磨区三宅）は、JR姫路駅前から広い道を南に歩き、姫路市役所を左手に見て、国道2号線・姫路バイパスにぶつかる手前になる。集合住宅建築地で、駅からほぼ2km。現場は姫路平野の中央部になり、市川（いちかわ）の分流である船場川流域〔右図〕。

周辺の遺跡

豆腐町遺跡（飫磨郡家か）

周辺は弥生時代～古墳時代の遺跡が集中する地域で、三



宅遺跡も異なる時代の遺構が重なる複合遺跡である。

白鳳・奈良時代の遺跡では、JR姫路駅とその周辺に広がる**豆腐町遺跡**が三宅廃寺と関連するであろう。

墨書き土器に、「郡（左欄下図）」「寺（下図）」「田中寺」「三宅」「封」などがあり、課税台帳の下書きとされる漆紙（うるしがみ）文書も出土している。戸籍や計帳（けいちょう）を作成するのは郡家（郡の役所）であり、飫磨郡家（しかまぐうけ）が付近に存在した可能性が高い。

軒丸瓦や法会に使ったのではないかと思われる奈良三彩の小壺などが出土しており、郡家に付属する**仏堂**の存在も考えられる。



都太細江（つだのほそえ）・播磨川

往時の市川（播磨川）河口は現在より西に振れており、三宅遺跡（廃寺）の南方と推定されている。国道250号線付近に砂州の名残が残り〔下図 高橋2007〕、その北側には潟湖（ラグーン）が形成され、津（泊）になる入江があったのであろう。「萬葉集」には、**都太細江・播磨川**などの地名がみられる。

山部赤人（やまべのあかひと）は、都太の細江で波が静まるのを待っている。都太は、津田村・津田天満宮など地名を残し、菅原道真が大宰府に左遷される途次立ち寄ったそうだから、平安時代にも津（泊）の機能をもっていた。細江も船場川河口付近に地名が残る。

天平八年（736）、新羅に派遣された**遣新羅使節**は、都太細江で仮泊したのであろうか。飾磨川が詠み込まれた古歌（恋歌）を誦詠している。

三宅遺跡の立地は、市川の水路、瀬戸内海の海路ともアクセスでき、ミヤケ設置地として優れる。



飫磨御宅・

賀和良久三宅

三宅遺跡は「風

土記」の飫磨郡伊

和里（貽和里）に

比定され、貽和里

には、「**飫磨の御宅**、…又、**賀和良久三宅**（かわらくのみやけ）といふ」と、ミヤケがあつたことが記載される。

ミヤケは6世紀以降、畿内のヤマト王権が日本各地の重要地域に設置した支配の拠点で、播磨では二人の大王（顯宗・仁賢天皇）の拠点になった加古川流域の**縮見屯倉**（しじみのみやけ）がよく知られる。

三宅遺跡 既往の調査（姫路バイパス周辺）

一帯は三宅遺跡として周知されており、1990年に刊行された『姫路の文化財』では、「1970年、姫路バイパスの基礎工事によって**大量の古瓦や土器類**が出土した。……発掘調査は実施されなかった」とある。

『姫路市史』では、収集された3点の**軒平瓦**について、「桶巻き技法で製作され……、その年代は、7世紀後葉～8世紀初頭」とされている〔今里2010〕。

奈良～平安時代の遺構・遺物〔姫路市2014〕

遺構

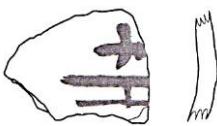
土坑（穴）、溝（流路）、掘立柱建物跡・柵跡などである。溝は調査地の北西から南西に縦断する流路跡で、延長38m、幅約5～14m、橋があった可能性も指摘されている。溝の南に掘立柱建物跡・柵跡がある。

掘立柱建物跡は方位を正方位（北）にとり、2間×4間で三面に庇が付くかなり大型建物。建物の南に柵跡が残り、重要な建物だったようだ。

遺物（瓦以外）

墨書き土器「寺」 流路から2点の

墨書き土器が出土しており、うち1点は下半が欠けるが「寺」（右図）と読



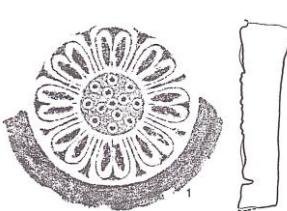
め、三宅遺跡が寺と関連することが文字資料でも裏付けられた。埴堀・轍（ふいご）の羽口（はぐち）・鉄製品・鉄滓・銅滓が出土しており、地山の赤化も確認できることから、鍛冶が行われていた。寺の付属工房が存在したようである。漆付着土器や製塩土器も出土している。官人の着用する帶金具である丸鞆（まるとも）もある。

瓦

軒丸瓦 6種（1～6種と仮称） 20点（出土点数）

1種 花弁に稜をもつ素弁の蓮華文 1点

2種 複弁八葉蓮華文 辻井廃寺I型と同范 5点



↑ 单弁六葉蓮華文

← 辻井廃寺出土のI型

3種 单弁六葉 見野廃寺・市之郷廃寺と同文 1点

4種 单弁八葉蓮華文 4点

5種 「播磨国府系瓦」の本町式 8点

6種 单弁十二葉蓮華文 1点

軒平瓦 6種（1～6種と仮称） 67点

1種 四重弧文 36点

2種 五重弧文 10点

3種 均整唐草文 太寺廃寺（明石市）と同文 8点

4～6種 いわゆる「播磨国府系瓦」 13点

古大内式（1点）・本町式（4点）・北宿式（8点）

「播磨国府系瓦」 山陽道の駅家や播磨国府が援助した寺（定額寺 じょうがくじ）に提供された瓦とされ、奈良時代後半～平安時代前半にも寺院が維持されていたことを裏付ける軒瓦である。名称は代表的な出土地（遺跡）により名付けられており、古大内（ふろうち）遺跡は賀古駅家、本町遺跡は播磨国府、北宿（きたじゅく）遺跡は佐突（さつち）駅家に比定されている。

瓦（寺院）のネットワーク

瓦のネットワークからみると、創建時には辻井廃寺（姫路市辻井）と同范の瓦があり、両寺の造寺集団・氏族は

関係があつただろう。瓦は辻井廃寺が先行する。

辻井廃寺は巨智里（こちのさと）にあり、韓人（からひと）柞（なら）山村巨智氏が創建を主導した寺院と考えられている。地方では稀な僧坊跡も確認され、飫磨郡で最も有力な寺院である。墨書き土器など文字史料も出土しており、木簡の裏面に漢字を練習した習書（しゅうしょ）木簡には「己」「知」もある。

太寺（たいでら）廃寺（赤石郡）と同文（均整唐草文）の軒平瓦の出土も注目される。瀬戸内海沿いに位置する寺同士のつながりが存在したようである。

軒瓦の年代

概ね2時期に区分される。I期には2～4種が該当し、7世紀末～8世紀初頭。II期には播磨国府が関与したと考えられている、いわゆる「播磨国府系瓦」を分類し、8世紀中葉～9世紀前半とされる。

壇（せん 煉瓦状の焼物）11点

須弥壇などの基壇に使われたものであろうか？ 芦屋廃寺（芦屋市）では大型の壇が出土している。



石製品（石燈籠の火袋）2点

実際に使用されており、内面は被熱により赤化している。年代は10世紀代を下限とする。石燈籠の出土は寺院以外に考えられず、寺院の存在を裏付ける。

播磨での類例は、加古川の支流・野間川流域にある西脇市明楽寺町の六所神社・薬師堂境内に塔心礎と、古様式の石燈籠が現存しており、詳細な報文がある〔藤原他2002〕。明楽寺廃寺と仮称して紹介しているが、この石燈籠の笠部と中台にある八葉の素弁蓮華文は、大和當麻寺金堂前石燈籠（国重文）の中台の文様に酷似する。

他に、河合廃寺（小野市）でも出土している。

三宅廃寺の推定寺域 創建氏族（知識）集団

三宅遺跡と呼ばれた遺跡では、白鳳時代～平安時代の瓦、寺院以外にその用途が考えられない石燈籠、「寺」と書かれた墨書き土器も出土した。塔址や金堂址など伽藍の遺構はまだ確認されてないが、廃寺址、「三宅廃寺址」であることはほぼ確定した。

推定寺域 報告書で三宅遺跡周辺の条理区割が復元されている。正方位（正北）ではなく東に傾いており、山陽道を基軸にする条理区画とされる。

その中にあって三宅遺跡が位置する字（あざ）大町と南隣の字大門との字界は正方位に近く、調査された掘立柱建物跡もほぼ正方位を示す。1970年代に布目瓦が採集された場所も字大町に集中する。字大町の南北字界は約140mを測る。今回の調査により、この範囲に「三宅廃寺」が想定されている。東西は不明だが、西隣には堂ノ前という曰くありげな小字が残る。

創建氏族・造寺知識集団について

風土記では、伊和里（貞和里）に王権を構成する有力豪族である尾治連（おはりのむらじ）、韓人が登場する。両者は飫磨ミヤケ設置と関連し、三宅廃寺の創建にも関わったのではないか、と想像しているが。

■三宅廃寺（三宅遺跡）所在地



[姫路市2015]から引用

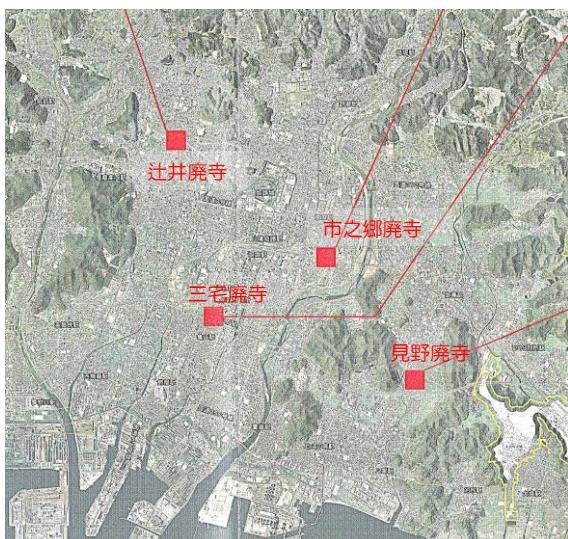
■調査地周辺の条理地割

[姫路市2014]から引用



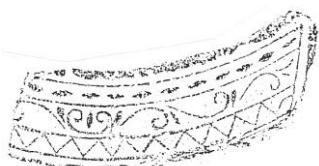
■関連する古代寺院の位置

[姫路市2017]から引用



■太寺廃寺出土軒平瓦

[井内1990]から引用



■萬葉集

■風吹けば 波か立たむと さもらひに

都太の細江に 浦隱（うらがく）り居（を）り

卷六 九四五

題詞に、「辛荷（からに）の島を過ぐる時に、山部宿禰（すくね）赤人の作る歌」とあり、その第三反歌

*辛荷の島は、室津（たつの市御津町）の沖合の三つの小島で、『播磨国風土記』には「韓人（からひと）の積荷が流れ着いたので韓荷島と号（なづ）く」とある。この韓人は新羅の客（まれびと）である。

■わたつみの 海に出でたる 飾磨川

絶えぬ日にこそ 我が恋止（や）まめ

卷十五 三千六百五

題詞に、「新羅（しらき）に遣はさるる使人等、別れを悲しごて贈答し、海路（うみつけ）にて情（こころ）を勧（いた）ましめて思ひを陳（の）べ、并（あは）せて所に当りて誦（うた）ふ古歌」とある。

播磨川の流れが絶えぬように、私の恋も止むことはない。

■播磨江は 潟ぎ過ぎぬらし 天（あま）伝ふ

日笠の浦に 波立てり見ゆ

卷七 一一七八の異伝

*日笠の浦は不詳。播磨江は播磨の海浜を指すものか。

■引用・参考文献

兵庫県教育委員会 2007『豆腐町遺跡 I』第322冊

兵庫県教育委員会 2012『東沢1号墳』第431冊

兵庫県立考古博物館 2013『東沢1号墳』

『ひょうごの遺跡—調査研究速報—』vol.5

姫路市埋蔵文化財センター 2009.11.28

「豆腐町遺跡 現地説明会資料」

姫路市埋蔵文化財センター 2013.10.5

「三宅遺跡 現地説明会資料」

姫路市埋蔵文化財センター 2014

『三宅遺跡 発掘調査報告書』

姫路市埋蔵文化財センター 2015

『TSUBOHORI 2015—姫路市埋蔵文化財略報—』

姫路市埋蔵文化財センター 2017

「蓄神來臨—姫路の古代寺院—」

* * *

井内功・井内潔 1990『東播磨古代瓦聚成』

井内古文化研究室

木谷幸夫 1990「三宅遺跡」『姫路の文化財—地域別文化財一』第2巻 姫路市教育委員会

藤原良夫・鈴木武・福澤邦夫 2002

「播磨明楽寺の塔心礎と八角形石燈籠」

『歴史考古学』第51号 歴史考古学研究会

高橋明裕 2007「屯倉と播磨一飴磨屯倉の復元—」

『風土記から見る古代の播磨』神戸新聞総合出版センター

今里幾次 2010「三宅遺跡」「辻井廃寺」

『姫路市史』第七巻下

寺岡洋 2010「託賀（多可）郡の古代寺院」

『むくげ通信』240 むくげの会 *明楽寺廃寺

寺岡洋 2011「飴磨郡の古代寺院（続）」

『むくげ通信』244 むくげの会

寺岡洋 2017「市之郷廃寺と推定飴磨郡家（豆腐町遺跡）」

『むくげ通信』281 むくげの会